

三十年の歴史

さけ科学館30年に至るできごとの年表

年	できごと	年	できごと
1978(S53)	10月 さっぽろサケの会が発足 カムバックサーモン運動が始まる		度の輸送とし、斃死はほとんどない)
1979(S54)	豊平川を「調査河川」に指定することにより、30年ぶりにサケ稚魚放流が実現する(計100万尾) 3月8日の放流初日には、幌平橋下流の会場に板垣市長のほか、1000人を超える市民が集まった		6月8日 回遊池(現在のかんさつ池)竣工 さっぽろサケの会が解散し、活動を引き継ぐ団体として「北海道サケ友の会」が設立された サケ科魚類(サケを除く)15種類を飼育展示
1980(S55)	札幌市民と同じ数として、計140万尾のサケ稚魚を放流(翌1981年も同数放流) 河川への関心の高まりもあり、札幌市内でサケの目撃情報相次ぐ 11月 東白石小学校のサケ学習で、白石神社境内のミニ孵化場でのサケの飼育が始まる	1986(S61)	12月 東白石小学校の敷地内に「さけ学習館」が設置される 以後、サケの採卵から稚魚の育成までを校内で学習として実施 サケ科以外の魚類16種を飼育展示 7月11日 学習棟(採卵等の体験学習の会場、図書等資料の保管・閲覧、ボランティア控室等の機能を有する施設)の着工 10月 市民の有志2名がサケ産卵池の解説等を開始(最初のボランティア活動) 10月16日 学習棟竣工 この年から始めた「採卵実習」の会場として使用 野外での体験学習として「サーモン・ウォッチング」「さかなウォッチング」をこの年から実施
1981(S56)	8月 上旬と下旬の2回、記録的な水害(通称56水害)が発生 石狩川流域で多大な被害が発生し、豊平川も大洪水となる 秋、放流魚由来のサケが豊平川に遡上 市民の関心は高く、マスコミも連日報道するなど「サーモンフィーバー」となる 厚別川合流点に設置された網ウライで223尾のサケが捕獲されたが、増水により上流に逃げたサケも多かった(遡上推定1,500尾) 捕獲されたサケはすべて千歳のふ化場に運ばれ、採卵された捕獲を逃れた多数のサケが市街地の近くで斃死する姿が見られ、市民からは豊平川独自のふ化場設置を求める声が高まった	1987(S62)	1986年度、年間入館者数の最多となる148,862人を記録 学習棟の実習スペース内に水槽を設置して「豊平川の生きものたち」の周年展示を開始 学習棟の一般向けの名称を「さかな館」とした 6月 さけ科学館解説ボランティアを公募、市民7名が登録 11月 図書貸出制度を定める(貸出は従来から希望に応じて実施していた)
1982(S57)	増殖事業河川ではないこと、また捕獲・増殖体制が整っていないことなどから、豊平川へのサケ稚魚放流数はこの年から30万尾となった 6月 東白石小学校児童の首相への直訴が実を結び、雁来堰堤をサケが上りやすくするため、流心部に魚道が設置された豊平川の環状北大橋と豊水大橋の中間付近にサケ捕獲設備(浮動式ウライ)が設置され、806尾捕獲(遡上推定1,700尾)河川敷には「さけ観察広場」が設置された 札幌市内の小学校6校の参加によりサーモンスクール事業始まる(札幌クラークライオンズクラブ、さっぽろサケの会の共催)	1988(S63)	3月19日 第1回「さけ科学館公開講座」を開催 以後、主に外部講師を招いて、1997年9月までに計18回開催 「サケ稚魚体験放流」をこの年から実施、併せて5月5日にボランティアによる「スライド上映会」を開催(上映会は1992年まで) ボランティアの学習のための「ボランティア研修会」を毎月開催(1993年頃まで)
1983(S58)	4月 サケ稚魚放流式の際、札幌市長と北海道知事が市民の強い要望を受けて、「(ふ化施設を含む)サケ公園を造りたい」との約束を交わした 豊平川は増殖事業河川となり、捕獲親魚、及び採卵した卵・稚魚はすべて国の管理下に置かれた この年の豊平川サケ捕獲数1,316尾(遡上推定1,900尾)	1989(H1)	3月 「さけ科学館館報」第1号を発行 開館から1987年度までの事業について報告 4月1日 開館時間がこれまでより30分長い9:15~16:45となる
1984(S59)	1月 北海道の協力を得て、道立真駒内公園内に札幌市が「サケ科学館」を建設することが決まり、公表された 5月 さけ科学館着工 6月4日 札幌市豊平川さけ科学館条例可決 施設名称が決定 9月1日 財団法人札幌市公園緑化協会設立 さけ科学館の管理運営業務を札幌市から受託する 9月14日 本館及び飼育池竣工 10月6日 札幌市豊平川さけ科学館開館 この日の入館者数3,104人 当初の開館時間は9:30~16:30 この年の豊平川サケ捕獲数355尾(遡上推定500尾)	1990(H2)	豊平川のサケ調査で河川白地図を用いた産卵床の記録を開始 以後、経年の状況比較が可能となる 採卵、川のサケの観察、卵と稚魚の世話の3つの内容を体験する「もの知り・さけ教室」を開催(1994年度まで)
1985(S60)	3月 札幌周辺の河川等水域(11定点)の水温等を月1回巡回して観測する「河川観測」を開始(1999.2まで) この年のさけ科学館経常予算額は2,352万円 豊平川は教育河川となり、豊平川の親魚、採卵した卵・稚魚は、すべて国の管理から外れた 豊平川にサケ捕獲施設は設置されず、さけ科学館職員による投網、曳き網等により捕獲して館に輸送・採卵し、獲り残しは自然産卵に任せることとなる この年1回目の千歳川産親ザケの活魚輸送で、計50尾を約1トンの活魚タンクで輸送し、うち8尾が斃死(現在は1回最大30尾程	1991(H3)	豊平川の雁来床止工が撤去される
		1992(H4)	9月15日 開館から約8年で累計入館者数100万人を達成 当日は来館者に記念品を配布
		1993(H5)	さけ科学館横の真駒内川で「川の自然観察会」を実施 釣り等による生物の採集体験と、水辺の環境について学んだ 7月 真駒内川源流部の万計沼でオショロコマ採集調査(初回)を実施
		1994(H6)	豊平川3号床止に魚道が設置される 以後、魚類の遡上に配慮して、豊平川中流域の床止工への魚道設置が進む 採卵用親ザケ(未産卵個体)の主な捕獲場所であった3号床止直下にサケが溜まらなくなり、以後豊平川での親ザケの確保が次第に困難になる 10月 開館から10年を迎え、本館展示ホールの展示物を全面リニューアル 星置川でさけ科学館として初めてサケの遡上・産卵を確認
		1995(H7)	豊平川のサケ遡上数6,600尾(1980年代以降の最大値)、琴似発寒川でも1,000尾を超える遡上を記録
		1996(H8)	2月 飼育用水の有効利用によりサケ科魚類の飼育環境を改善するための「ろ過循環設備」を新設



年	できごと
	豊平川5号床止に魚道が設置され、豊平川産親ザケの確保がいくつか困難になる
1997 (H9)	この年から、採卵用親ザケは豊平川産に頼らず、千歳川産の計画的導入に移行した。千歳川産メス90尾、オス50尾を導入したが、豊平川産はメス12尾、オス22尾の收容に留まった
1998 (H10)	3月 入館150万人を達成 特に広報、セレモニー等はなし 7月 日本動物園水族館協会との共同によるエゾトミヨ調査をこの年から毎年実施 6,7号床止に魚道が設置され、豊平川中流域のサケ遡上障害物がなくなって、サケは自由に産卵場所を選択できるようになる いっぽう、採卵用親ザケはほとんど捕獲できなくなった
1999 (H11)	2月4日 さけ科学館ホームページの公開開始 1999年度以降しばらく、館長はさけ科学館常勤ではなくなる(緑化協会課長等が兼務) この年以降、豊平川からの採卵目的の親ザケの捕獲・收容作業はしないこととなった
2000 (H12)	5月22日 さけ科学館ボランティアの会ホームページ "ikura" 公開開始 7月 1969年の調査報告書を頼りに職員とボランティア数名による豊平川源流部のオショロコマ調査(初回)を実施
2001 (H13)	2月22日 カナダ在住の学生 Emmett Wade さんの協力により、さけ科学館ホームページ英語版の公開を開始 11月 数年前から札幌市内河川で確認されているエビ 専門家の同定によりヌマエビ <i>Paratya compressa</i> と判明
2002 (H14)	3.24 オオクチバス(ブラックバス)、ブルーギルの譲渡を受け、外来生物として展示開始 4.1 さけ科学館ボランティアの会 規約等を整備 12月 創成川のテレビ塔横付近に数十尾のサケが遡上・産卵しかし後日の調査で確認した卵はすべて死んでいた
2003 (H15)	3月 新たに実習館が設置され、採卵等の屋内実習は以後実習館で実施される これに伴い、実習会場を兼ねていたさかな館は展示専用の施設となる 8月24日(日) 午前10時過ぎ 累計入館者数200万人を達成 200万人目は南区在住の松本仁くん(小学生) 記念品として武内朋之ボールペン画を贈呈 9月 水中写真家桑原慎和氏と豊平川源流部のオショロコマ調査
2004 (H16)	2月12日 紀宮様がさけ科学館をご見学 豊平川でサケ稚魚標識放流調査を開始(標識作業は2004~2007年放流の全個体を実施) 3月 館報第16号発行、印刷製本版はこの号で一旦終了し、以降はホームページでのPDF公開による発行 7月3日 さけ科学館来館者が利用する真駒内公園駐車場が有料化(毎年4/29~11/3の土日祝日、乗用車300円) さけ科学館開館20周年 記念事業の「さっぽろ・サケ月間」では、パネル展やサケフェスタ、シンポジウム(基調講演:C.W.ニコル氏)等を実施した さけ科学館初のオリジナルキャラクター「チェッポ君」誕生
2005 (H17)	4月29日 真駒内川公園橋直下で火災発生 さけ科学館の電源線を一部焼損 原因はホームレスの火の不始末 自由参加型体験イベント「土曜体験」を開始 内容は「そっと・タッチ・プール」「無料エサやり体験」など 6月1日 外来生物法が施行、さけ科学館では6ヶ月の猶予期間内にオオクチバス、コクチバス、ブルーギルの飼養許可を申請 本館展示ホールを一部改装 サケの剥製を用いた産卵行動ジオラマ展示などを新たに設置

年	できごと
	次年度からのさけ科学館の指定管理者公募に4団体が応募 審査の結果、札幌市公園緑化協会が選定される
2006 (H18)	2月1日 さけ科学館でも飼育展示しているウチダザリガニとウシガエルが特定外来生物に追加指定される(期限内に飼養許可を申請) 4月1日 指定管理者制度によるさけ科学館の管理運営が始まる 豊平川のサケ標識調査 親魚の調査が始まる(2011年度まで) さけ科学館館報第18号をホームページで公開、館報の体裁を取る報告書は今号で一旦終了
2007 (H19)	いつ来てもエサやりが体験できるよう、サケの仲間エサ(ペレット)、イトウのエサ(冷凍オキアミブロック)の販売を開始 9月1日 ブログ(札幌サケ情報blog+)による情報発信開始 札幌市による行政評価で、さけ科学館が「施設の廃止を含めた今後の事業展開を考慮する必要がある」との評価を受ける
2008 (H20)	5月4日 カムバックサーモン運動以後の豊平川サケ稚魚放流数の累計が1,000万尾を超える さけ科学館のあり方を検討するため、札幌市が利用者や小学校を対象にアンケートを実施
2009 (H21)	1月20日、2月24日(2回) さけ科学館の今後の活動の方向性について各方面から意見を伺い検討するため、「さけ科学館活動検討委員会」を開催 8月 さけ科学館オリジナルキャラクター「リンカちゃん」誕生 まんが家のかじさやかさんが生みの親 さけ科学館存続問題の影響で、この年公募のさけ科学館の次期指定管理期間(通常4年間)が2年間に短縮される 結果は他に応募者がなく、公園緑化協会が選定される 12月5日 巡回企画展「川と海を旅する魚たち」開催(2010年2月11日まで)
2010 (H22)	さけ科学館存続の方針が決定 11月 サーモンスクール事業を札幌クラークライオンズクラブから引き継ぎ、以降さけ科学館の自主的事業として実施
2011 (H23)	4月 さけ科学館ホームページ 初の全面リニューアル 土曜体験を「わくわくたいけん」に名称変更 週末の日程調整の幅を広げ、他の実習等と合わせて普及事業の充実を進めた 9月10日 天皇陛下が北海道行幸でさけ科学館をご視察 警備体制確保のため、開館以来初の臨時休館とする さけ科学館の3回目の指定管理者公募は応募1件のみ 公園緑化協会が選定される
2012 (H24)	3月 「さけ科学館研究報告」の発行、公開開始 CISE ネット(実物科学教育を進める札幌周辺地域教育施設のネットワーク)にさけ科学館が参加、サケトランクキットを開発
2013 (H25)	1月26日 札幌駅前通地下歩行空間で実施された「CISE サイエンス・フェスティバル」に参加 さけ科学館からはサケの仔魚・稚魚の水槽展示とサケトランクキットを紹介
2014 (H26)	1月 さけ科学館と研究者、河川管理者、行政、市民有志などが参加して、札幌ワイルドサーモンプロジェクト(swsp)を設立 さけ科学館開館30周年 11月3日の記念フォーラムではswspのお披露目と、目標として豊平川の野生サケ保全の取り組みを市民に提案
2015 (H27)	豊平川の野生サケ優先的保全を目指した標識放流調査・順応的管理導入検討の取組みが、第6回さっぽろ環境賞の生物多様性部門で優秀賞を受賞 2月末現在、累計入館者数は2,907,599人(300万人は2016年度に到達見込み) 3月 開館30周年記念誌(本誌)を発行

開館までの経緯～開館当時の札幌市担当職員インタビュー



さけ科学館開館にあたる時代の札幌市担当職員
札幌市南区土木部維持管理課管理係(現職)

高橋 尚己さん(以下、高橋)



写真1 開館までの経緯を語る高橋尚己さん

札幌市が「さけ科学館」を造ることになった理由

(前田) 高橋さんはさけ科学館ができる時に担当職員として尽力された方とお聞きしました。さけ科学館が開館するときのお話をお聞かせください。

(高橋) 僕が担当して始めたころは、カムバックサーモン運動から4年くらい経っている頃だった。サケは一般の人が扱えない規制の掛かっている生き物だから、水産庁と道を巻き込んで、運動を率いる団体が活動している豊平川のある札幌市も中に入って、豊平川サケ連絡協議会ができていた。そして、団体ではそのときで3年くらい前から、千歳のふ化場からサケの稚魚を持ってきて、豊平川に放していた。サケは3～4年くらいしたら帰ってくる生き物だから、ちょうどその年の9月にバンバンとサケが戻ってきた。当然帰ってきたら行くところがないから、だいたい堰堤のところに、魚道なんて昔は無かったから、そここのところにみんなたまって、最後は力尽きて累々としていくわけなんだよね。それを市民も見ると当然それを触る人もいるよね。そうすると持って帰る人がいれば密漁になってしまう。だから、戻ってきたサケはどういうふうにするの、となってね。その年から戻ってきたサケをどうするかということを考え始めるようになった。それが発端で、今のさけ科学館というのがある。

(前田) 一緒に協議していた、水産庁や道がさけ科学館を造る、という案はなかったのでしょうか？

(高橋) それはならない。水産庁や道は水産資源としてのサケの事業をしていたけれども、豊平川のサケっていうのは漁業ではないでしょう、という立場だったから。また、他の増殖河川と違って、当時は水質が戻ったといっても環境が劣悪でいい回帰率は望めないと考えられ



さけ科学館職員 前田 有里(以下、前田)
札幌市みどりの管理課職員

阿部 寛子(以下、阿部)

ていた。だから、やっぱり豊平川って札幌市の中を流れている大事な川だし、だからそれをきれいにするっていうことは札幌市としてもいいことだから、それは(札幌市が)踏み出さざるを得ないかなっていう風に動いていったっていうのが当時の流れかな。

(前田) 豊平川のサケの再回帰は1981年と記録されているのですが、サケが戻ってきてどうしよう、となったのは再回帰したまさにそのときなのでしょうか？

(高橋) そう。当時の札幌市の自然保護課の課長に、豊平川に戻ってきたサケが累々となっていて市民が見て問題化しそうだから、対応してくれと指示を受けた。それで、本来は自然ではそのままにすべきサケの死体なんだけれども、まずはそれを集めて清掃業者に埋め立て処分をさせることをやった。それから、関係者と何回も話し合いをやって、最終的には特別な市民運動から始まった、カムバックサーモン運動の象徴である、川をきれいにしていこうという象徴であるサケをこのままほっとくわけにいかんから、やっぱり最終的にリサイクルさせて、自然教育に生かせたら最高にいいということで、それでさけ科学館に至っている。

(前田) さけ科学館は開館当初、市民のふ化場としての役割を受けてできたと記録されていますね。

(高橋) ふ化場って、まったくやったこともないし、それで水産業自体も札幌市にないし。造るにあたっては水産庁と道の水産部のいろいろなお知恵を拝借していかなきゃならん、ということになったんだよね。まずは上がったサケ、初めは累々とした、だけど2年目も累々とさせる訳にはいかんよね。それでたぶん82年からだと思うけど、北海道さけ・ます増殖事業協会に捕獲のためにやなをかけてもらってさ。ようするに上がったサケはリサイクルしてまた豊平川に戻しておけば自然リサイクルの一つとしてなっていくよねと、そうすると札幌市で豊平川に上がったサケを捕獲して、それを孵化させた稚魚をまた放せば、それは豊平川に戻ってきたサケだから、それでもうリサイクルとしては完結だよ。

(前田) 雁来の方に捕獲場があったというのを聞いたことがあるのですが、それですよ。

(高橋) そこに職員がずっと常駐して、網をかけた。



捕獲したサケの一部はそこに回遊池を造って泳がせて市民に見てもらった。環境意識を高めるものだから。でも泳がせたのは一部でほとんどは千歳のふ化場に運んでもらって採卵した。その間は漁業として採卵していたんだけど、豊平川にリサイクルするためにはやはり独自のふ化場が必要だから、考えて行かなきゃならないという考えだった。

それにいつまでも水産庁に孵化の資源を出してもらうわけにはいかないし、早く施設を造らなきゃならない。施設の場所を決めるには、本当は水の出る場所を見つけて10年間くらいずっと毎日水量が一定かどうか調査して確認する必要があったけどそれを待てない。それで、まずは真駒内のあの場所に造ると初めに決めた。そして、ふ化場の施設を造るにあたって、こっちは素人だから、道の水産部の特別顧問の立場の柴田尚志さん（後の初代館長）と、当時北海道大学の研究室に所属していてサケの第一人者だった小宮山英重さんに声をかけた。それが開館の2年くらい前だから82年くらいだったと思うな。そのときにすでに84年の10月6日にオープンっていう日は決まっていた。

（前田） 逆算すると、結構早々に始めるんですね。81年にサケが来て、84年にさけ科学館を造るまで3年くらいしかないから、すぐに始めていることになる。

市民のふ化場なのに、水がでない!?

（前田） さけ科学館の飼育水として使用している地下水の井戸が、館からちょっと離れた小学校と中学校に2基あるのですが、それはどうしてその場所だったのでしょうか？

（高橋） ふ化場の建設というのは本当は水がすでに出ていて、水量も継続調査した上で進めるものだけど、道の水産部にももし水が出なくても水道水を引いてでもやりますとまで言って

納得してもらった。今のさけ科学館の敷地は道立真駒内公園の中に建っているけど、開館の1年前になってやっと、道の許可をもらって水を掘らしてもらうことを始めた。

（阿部） まずは敷地内で掘ったのですか？

（高橋） そう。公園のなかで83年の10月くらいから掘らしてもらった。道の水質試験場から昔の井戸があった場所のデータももらって、そして掘るんだけど、いっぱい掘れないから、一番確実らしいところから掘る。しかし水が出ない。そのたびに掘削の許可を取りながら、同時にオープンセレモニーの準備を進めながら、札幌市の建築部に設計を頼みながら、掘削は敷地内で10本は掘ったと思う。結局オープンの年の84年の3月31日まで水は出なかった。それで困ったなど。データには今水を引いている曙小（現在の真駒内公園小）に井戸があったという記録があったからそこを掘ったの。そしたら水がでた。たまたまだったの。

（阿部） それでは、その後は急ピッチで半年で進んだのですか？

（高橋） そう。本来の水の調査はできないままだったから、地下水に窒素ガスが含まれていて、飼育している稚魚に影響を与えるとわかって、あとから曝気槽を作ったりした。それがない時代はやっぱり魚が死にやすかったんだ。当時は初代学芸員の小宮山さんと初代館長の柴田さんにはいろいろ教えてもらって、足を向けて寝られないね。その二人がいなかったら、全然できていない。

（前田） カムバックサーモン運動から、さけ科学館開館までにこぎ着ける時代の貴重なお話がよくわかりました。知らないことばかりでとても勉強になりました。

（高橋） 印象深い仕事だったよ。語り尽くせないね。

（前田・阿部）

本当に貴重なお話をありがとうございました。



写真2 1982年9月16日撮影、豊平川の雁来付近にあったサケの捕獲施設



写真3 1982年9月22日撮影、同じく雁来にあった豊平川サケ観察広場 写真2・3はともに札幌市公文書館所蔵

開館当初の職員の記録

30年前からサケとさけ科学館と関わって

札幌市豊平川さけ科学館元職員（1984～2003年） 小原 聡

30年前、開館を迎えたさけ科学館の裏手には100坪程度の空き地があった。発足したばかりのボランティア制度、そのボランティアさんとの懇親会用に少々の畑を耕し、エダマメとトウキビを植えた。盛夏を彩るキリギリスが鳴き始めた頃、キジの親子が実ったトウキビを食べている。しめしめ、「わらしべ長者」を実践すべく、覚えたばかりの投網を持ち出した時点で、館長にみづかり、社会人としての初歩の初歩から教えを頂く。もちろんキジは鍋に入ることはなく、悠々と実りの秋を満喫したようだ。懐かしい思い出である。

秋、豊平川にもシロザケが帰ってくる。普段の仕事にサケの遡上調査が加わるため、1年の中で最も多忙な時期となる。夏の終わりの淋しさ、無事に回帰したサケの姿に嬉しさ、事故もなく正月を迎えられるかという不安。退職して10年になる今でも毎年、この感覚が繰り返し蘇る。

さて、開館当初は、他の北海道の多くの河川同様「さけます増殖河川」であった豊平川が、昭和60年から「サケの教育河川」と位置づけが変更となり、回帰したシロザケの捕獲が国から札幌市へと移行された。捕獲の目的は、シロザケ回帰数の把握と翌年サケ稚魚を放流するための採卵数確保が主な目的であった。

それにともない、シロザケ遡上時期の9月～1月上旬までの間、捕獲調査のため、サケを輸送するための水槽、捕獲道具一式を満載したトラックで、週に3～4日、豊平川に出勤する事となる。予算的にウライの

設置は断念し、引き網、投網を駆使して捕獲を行った。

当時、川にはゴミが多く、サケよりもゴミを網から外す時間に手間取った記憶があるが、11月までは順調に捕獲調査を行う事が出来た。11月以降の問題はたった一つ、豊平川下流に設置されていた雁来堰堤であった。雁来堰堤は、昭和初期、農業用水の確保が主目的で設置されたコンクリート製の小さなダムのような構造物であり、落差は2m程あった記憶がある。海から母川に帰るほぼ全ての魚を拒絶していたこの堰堤に魚道がついたのは、昭和57年であり、約50年の年月を経て、野生魚復活ののろしが上がった瞬間であったようにも思う。

ただ、冬が近づくと水温が下がり魚の活性が低下し、なおかつ、増水し魚道内の流速が速まるとサケの遡上が困難になる欠点があった。昭和62年12月、山に積もった雪が解ける気温の上昇、降雨があった。案の定、翌日にはチョコレート色の激流のなか、産卵場所まで登れないサケがコンクリート壁に無謀なジャンプを繰り返している。

救出目的の投網1投目が岩に絡む、足を激流に踏み入れ、網をはずした瞬間に体ごと川に飲み込まれた。水没する。直前に先輩の小宮山英重さんが川に飛び込むのが見えた。なんとか泳いで水面に出る事は出来たが、2人で水温1℃の豊平川で20分ほど水泳をする事になってしまった。

都市化と共に役目を終えた雁来堰堤は平成2年に撤去され、現在、全ての魚種がふるさとである産卵域まで、周年を通し、遡上可能になっている。

30年たった今、思い出の畑は樹林となり、冬期にはエゾモモンガがヤナギの冬芽を食べている。可能ならばもう少し、さけ科学館に携わり、自然の移ろいを見守りたい。



写真1 1990年代、豊平川サーモン・ウォッチングの際に取材を受ける。小原聡さんは右。隣は岡本康寿館長



写真2 2009年1月撮影 退職後も、専門性を活かしてサケの産卵床調査などに関わっている

館長の歴史

さけ科学館の館長について、その歴史

札幌市豊平川さけ科学館（1990年～）館長
公益財団法人札幌市公園緑化協会事業課長 岡本 康 寿

一般に「館長」といえば、その施設の顔とも言える人物である。さけ科学館の館長もこれまで、その時々館の歴史を紡いできた方々である。近年は私を含め、さけ科学館に常駐しない館長が続いており、少々残念であるが…。ここで歴代館長の人となり、初期の方を中心に紹介したい。

しばた なおし
柴田 尚志（初代、1984-1986）

初代館長の柴田さんは、北海道立水産孵化場の出身で、現役時代には主にシシャモやアユ等の調査研究をされていた。温厚な人柄で親しまれていたが、学究肌の人でもあり、さけ科学館の業務の中でもサケのふ化等においては、厳しく指導にあたられていたように伺っている。

うちやま まさあき
内山 正昭（第2代、1987-1988）

2代目の内山さんも道立水産孵化場の出身で、森支場長などを務められた方である。筆者は数えるほどしかお会いしたことがないが、穏やかな人柄の方と伺っている。

おさない みのも
長内 稔（第3代、1989-1994）

3代目の長内さんは、道立水産孵化場の副場長を務められた方で、サケのふ化事業や調査等の業務にも精通しておられた。一見「こわもて」な印象を受けるかもしれない（正直、怒ったときは「おっかない」）が、実際には誠実な人柄で、筆者がさけ科学館で勤め始めた頃、サケ科魚類や淡水魚の取り扱いの基礎について、要所で教えていただき、大変お世話になった。

かねた ひさお
金田 壽夫（第4代、1995-1998）

4代目の金田さんは、さっぽろ円山動物園の園長を務められた方で、その後、同動物科学館の館長を経て、さけ科学館にいられた。動物科学館時代にご自身で確立した、コオロギの周年養殖による両生爬虫類の飼育技術をさけ科学館に導入していただき、カエルやサンショウウオの生体展示の基礎を築いていただいた。そのほか、魚に限らない広い視野での生き物との接し方について、色々教えていただくことが多かった。

当時、筆者が自己流で楽しんでいたアユの友釣りを教える機会があったが、すぐに師匠のウデを追い

越し、今でも毎年夏には自宅で生きたアユを確保して友釣りに通われている。

5代目以降の館長は、諸般の事情によってさけ科学館常勤ではなくなり、また、魚類や生物の「専門家」ではない方に務めていただくこととなった。実質的には「肩書としての館長」となったことは残念であるが、この間、主任などが現場における長の役割を担い、必要な場面では館長に対応していただくなど、適切な運営に努めてきた。

代	館長	年度
5	下屋敷義政	1999
6	長田 光子	1999
7	上原 昌勝	2000
8	松本 武士	2001
9	渡部 明	2002
10	石田 誠一	2003-2005
11	荒川 克郎	2006-2007
12	岡本 康寿	2008-

2008年から筆者が館長となり、館の業務に通じた現場付きの館長が復活する形になったが、その後、2010年に札幌市公園緑化協会の本部に異動となり、現在は現場から離れた館長となっている。

今後のさけ科学館館長のあり方として、筆者の経験をふまえて述べさせていただくと、やはり長年さけ科学館に勤めて経験を積み、館のことに精通した者が館長となり、館に席を置いて事を進めるのが理想と考える。今は諸事情により、それは実現していないが、さけ科学館が今後もよりよい活動を目指して取り組むために、検討していきたい課題である。



写真 3代目長内稔さん(左)と4代目金田壽夫さん(右)

4代目のさけ科学館館長として勤めて

札幌市豊平川さけ科学館
第4代館長（1995～1998年） 金田 壽夫

子どもの頃から動物が好きで、近所の沢でニホンザリガニをバケツに半分捕まえたり、沼地でドジョウやフナを掬って家に持ち帰ったが、いずれも一晩で全滅してしまった。当時は、酸素欠乏などという常識の無かった時代である。

小学校の先生に連れられて山に行き、カスミ網で小鳥を捕まえ、餌付けして正月にウグイスを「ホーホケキョ」と鳴かせる技術を身につけた。先生から「将来は小鳥屋になれ」と薦められた。

長じて獣医の資格を取り、縁あって円山動物園に就職、動物科学館を含めて31年間在職した。当時、動物園・水族館・博物館の役割は、レクリエーション、教育、研究、自然保護の四つと言われ、なかでも自然保護の分野は新しいテーマで環境教育として、

「地球環境悪化と野生動物の絶滅」などをテーマに、環境保全の重要性について啓蒙活動を行っていた。

動物科学館は動物園の教育活動の集大成として建設したもので、映像、図書、剥製、模型、パネルなどで動物界の不思議、環境教育などをわかりやすく解説し、専門技術員を配置して市民からの質問に答えていた。

1992年4月1日から1997年3月31日までの5年間に動物科学館で受けた動物相談は7531件（一日平均4件）であった。

1995年4月豊平川さけ科学館の4代目館長として勤めることになった。

専門外の魚類を扱うさけ科学館の仕事を引き受けた理由は、「カムバック・サーモン運動」で新設された豊平川さけ科学館もすでに

10年経過し、前任三代のサケの専門家が館長として必要業務を軌道に乗せており、若手職員も専門職なので、当面、業務上の知識に乏しい素人でもまとめ役くらいはできそうだと考えていた。また、動物科学館時代に、動物相談の教材として熱帯魚、北海道の魚類・両生類・爬虫類の飼育を担当し、最大60センチ水槽40個を管理していたので多少の知識は持っていた。若い頃、諏訪湖のほとりで覚えた投網の技術を北海道の鮭漁に試せる機会を得たのも喜びであった。

館長として

仕事の内容がわからなくては指導も監督も出来ないと、すべての業務について実習してみた。

一番体に堪えたのは、厳冬期の産卵床調査と斃死魚のカウントで、厚手の胴付きをはいて雪道を歩くのさえ大変なのに、凍り付いた石の上や水中歩行は困難で、つくづく職員の苦労が身にしみた。ということで、しばらくは事務所の中で図書の貸し出しや、来館者の案内業務などを手伝っていたが、やはり何か

平成7年当時のさけ科学館の現況		
職員数5名 嘱託職員数1名 ボランティア33名		
施設	本館	事務室 資料展示室 資料展示 模型展示 図書室 テレビ上映 サケ科幼魚展示室 同飼育予備室 サケ採卵孵化室 サケ科成魚地下展示室 機械室・倉庫 トイレ 屋外展示・飼育池・産卵行動観察池
	さかな館	サケの採卵実習等教育活動会場 ならびに豊平川関連魚類展示室
		用水井戸 揚水ポンプ2系統
業務内容	館内飼育魚類の飼育管理 カムバック・サーモン運動 豊平川への放流事業と産卵床調査 放流用稚魚の採卵・孵化・育成 回帰親魚数の確認のための産卵床調査と斃死魚数確認 採卵用親魚の購入と運搬 開館当初から続く普及事業 サケ稚魚体験放流、サケの採卵実習 サーモン・ウォッチング、さかなウォッチング その他の普及事業 主なる札幌市内の河川水質調査	

の動物飼育を持たなくては落ち着かない。職員の担当業務を再検討した結果、さかな館の中で飼育されている豊平川関連生物の飼育担当に立候補した。

さかな館は、サケの採卵実習や各種講習会の会場としての役割と豊平川と関連の深い生物の展示場として使用されていた。当時は予算と人手不足でさかなの水槽は大小様々、ガラスとアクリル製が混在し、濾過槽や加温装置、照明も不十分であった。それでも子供達は身近な豊平川のコイ、フナ、ウグイ、拾われたミドリガメなどに興味を示し、様々な質問をしていた。

さかな館の担当を引き受けて最初に検討したのは、もう少し展示効果の高い見栄えのする水槽を揃えられないかということで、予算担当者と交渉したが「予算に余裕はありません」という事。やむを得ず、倉庫に眠っていた古い60センチ水槽で使えるものを選別し、とりあえず展示動物種を増やすことにした。新しい魚のほか、無脊椎動物、両生類、爬虫類などの入手を検討した。動物園の動物科学館で、私自身が飼育していたカエルの仲間、サンショウウオの仲間、ザリガニなどが餌用のフタホシコオロギと共に来館して賑やかになった。

一年後、札幌市からの委託業務「公園砂場のイヌ・ネコ回虫症の危険性について」をさけ科学館で受託し、その収益金でさかな館内部の改造を行った。60センチ水槽一式を40セット購入、水槽の台、上下二段式雛壇は職員の手作りで、館内北側・東側の壁面に設置、一段と展示効果が向上した。ただ、この設置方式では水槽背面の作業スペースが無いため、観客通路側から作業しなければならず、客の多い夏期間は、毎朝1時間早出しなければならなかった。この超勤分は「鮎の遡上調査の時間延長」で相殺することにした。



写真1 金田壽夫館長が担当しておられた頃のさかな館。雛壇水槽に工夫して配置してある

現在のさかな館の内部は、私の退職後にレベルアップされ、作業もしやすいように工夫されている。

館長就任当初の問題点

さけ科学館は豊平川と真駒内川に挟まれた三角州に存在し、使用水には恵まれていると思っていたが、放流用サケ稚魚の増加や展示用サケ科の飼育数増加のため慢性的な水不足に悩まされていた。川の水は上流域の養魚場の排水で汚染されており、遠く曙小学校（現在の真駒内公園小学校）と曙中学校の校庭内にそれぞれ1カ所ずつある井戸を掘削して揚水していたが、次第に揚水量が減少し、酸欠・水質汚染のため孵化率の低下、様々な魚病発生の原因となっていた。

対応策として、揚水パイプの先端部の目詰まり清掃と、使用水の濾過による再利用のため、大型濾過装置を新設することにした。

濾過槽には、平面式と立体式、密閉式と開放式があるが、それぞれ一長一短が有り、職員と相談して、平面式で開放式の酸素の補給がしやすい濾過槽を新設した。これによって、さけ科学館の水不足は一応解決したが、濾過槽の維持管理業務は職員の負担で有り、申し訳なく思っている。

最近、さけ科学館は展示資料館の改修、さかな館内部の展示変更、新しい学習場の増設、サケフェスタ・さかなの給餌などのイベントの開催で豊平川水辺の環境教育の中核施設として重要な役割を果たしており、これからの活躍が期待されている。

私自身、さけ科学館に勤めて得た最大の収穫は、職員から手ほどきをされた「鮎釣り」で、いまでは、私の老後の人生の過半を占めている道楽である。感謝



写真2 サケ稚魚体験放流に参加する金田壽夫さん(右から2人目)。退職後は、ボランティアとして長く関わってくださっている

ボランティアスタッフに支えられて

01 豊平川さけ科学館と私 水質と関連して

特定非営利活動法人水圏環境科学研究所 代表 橋 治国

元北海道大学工学部衛生工学科准教授、大学勤務時代からボランティアとして関わっている。

中国湖沼水質調査のために、昭和63年夏、南22条橋から上流にランニングで身体を鍛えた。ゴール近くのさけ科学館から、「橋さん、入りなさい!」との声。支笏湖水質で話し合った初代館長柴田尚志さんだった。夕方だったので一杯ご馳走になり、その日は終了。以後、二、三代の内山正昭、長内稔館長とは、鮭回帰と戦後の水質汚濁を話題に親しくさせていただいた。当時の職員小宮山英重さんからの地下水中の高濃度窒素ガスによる魚病の相談が強く記憶に残っている。小宮山さんは、何段にも積んだ木箱の上から地下水を流して、窒素ガス除去に効果を上げた。偶然現場で、大学の先輩(故)鳥田一功さん(元札幌市下水道局局長)とお会いし、本格的なクーリングタワーが市に申請・建設された。今も順調に動き、魚は元気なようだ。さけ科学館での水質を通して、生きた勉強を学ぶことができた。

今一番、楽しく、暖かく心に残るのは(故)大江真佐人さん(元北海道新聞社勤務)を中心としたボランティア活動である。5月4日には、岡本康寿(12代)館長の指導で放流稚魚 Copp 配布係として頑張った。子供さんに、「水はきれいだね。」と少し環境教育。最近では環境の日の真駒内川の水質観察でのお手伝い。現職員佐藤信洋さん、前田有里さんが真駒内川の清掃問題と関連して水質測定を継続されていると聞いた。今後に期待したい。

調査やアルバイト学生の手話で科学館に協力もした。調査の例は、旧職員小原聡さんの指示による豊平川のザリガニ生息域の水質調査である。こんな身近な住宅地近くにと驚くと共に、さけ科学館の環境

保全に対する具体的な行動が期待された。金田壽夫(4代)館長により、サケと共に広く札幌圏生物相観察に発展したと感じた。

私が、さけ科学館にもっとも感謝したいのは、多くの学生の研究そして経済事情の大きな助けになったサケ回帰数推定のための投網のアルバイトである。投網は、自然に対する具体的視点を持つ契機になった。指導する職員の佐藤さんの目には、寒い河川敷で軍手で耳を押さえる学生の姿は厳冬の野猿であったようだ。岡下淳君(1994修、現開発局)は、動かぬ身体を発見したこともあった。社会とのつながりを感じた。大森博之君(1989修)は、今も大学に寄らず、科学館に姿を見せることもあるようだ。彼は、水保でお医者さんをしている。開館当初から長く臨時職員として勤めている小澤加代子さんの学生に対する総合評価は、「よう頑張るようになった。」

さけ科学館は、小・中学生、そして広く市民に対して、サケを通して大きな環境教育の場となっている。我々、学生を含めた研究機関に対しては、現実の研究の場。札幌市には、さけ科学館に教育そして研究機関としての位置づけを期待したい。

これまで私がお世話になった旧職員小宮山英重さんは知床の番人としての野生鮭研究所所長、堀本宏さんは登別のふるさと自然情報局長兼務のふ化場長、小原聡さんはモモンガ博士としての写真家として、ボランティアの鳥居亮一さんは矢作川で今も活動等、多くの御活躍を聞きます。さけ科学館を通して、皆様広く活躍されていることを、最後に申し上げたい。



写真1 1986年のさけ科学館。写真右の白い円形の塔が、前年から稼働しているクーリングタワー



写真2 サケ稚魚体験放流でボランティアスタッフをする橋治国さん(左前)

02 家族ぐるみでさけ科学館と関わって

北海道漁業協同組合連合会（北海道ぎょれん） 石川 清

ご家族でボランティアとして関わり、永年ボランティアとして継続されている。

故郷の就職先から転職で札幌に戻った時に、指導教官から一本の電話があった。「わしゃ、応援しとるんじゃ。手伝ってくれんかのー。」これが、さけ館（さけ科学館）との出会い。歩いて7分の距離だから、すぐ行ける。ただの水族館と思っていたけど、出入りして見て、さけ館が「社会教育」の場だということをしみじみと感じるようになった。北海道大学教育学部の学生さんたちも来てたなあ。館の職員さんたちといろいろ議論したこともあった。さけ館をどうするか、豊平川をどうするか。豊平川で自然繁殖しているアユはいるか。では、調査してみよう。豊平川の上流にオショロコマがいるという記録がある。じゃ、調査隊を組んで調査するか。ニホンザリガニが希少種になっている。じゃ、札幌市内の生息地の調査をしてみよう。札幌周辺で希少種の水生昆虫の調査をしてみようか。地域限定のスミウキゴリの調査や展示もしたことがあったな。うちの奥様は内勤の仕事も手伝っていた。図書の貸し出し係とか、解説ボランティアとか。子どもが生まれてからは、親子でお手伝い。幼稚園くらいからは、サケ稚魚放流式の Copp 回収くらいはできるようになったね。

そのうちに、放流稚魚の Copp 入れもできるようになった。参加した子どもたちが「なんで、あの子だけ稚魚にさわれるんだ」と羨ましがってたな。でもね、ちゃんとした登録ボランティアだったんだよ。子どもたちにしてみれば、無料の金魚すくいみたいなもの、やりたかったんだろうな。その息子もいまでは本州で大学生。また、手伝ってくれる日がくるかな？



写真 サケ稚魚体験放流で、放流 Copp の回収のお手伝いをする石川清さんの息子さん。今では大学生に成長されている

03 さけ科学館で過ごした青春時代

合同会社マープルワークショップ代表

一般社団法人サイエンスコミュニケーション協会理事

ミュージアムプランナー・ワークショップデザイナー

高尾戸 美

学生時代からボランティアとして関わり、現在は博物館に関わる仕事を通じて、さけ科学館の特別展やイベントの企画を担当したこともある。

魚の死体が見つないだ縁

私がさけ科学館と関わることになったのは、1992年の秋に見学に来た際、地下水槽で見かけた魚の死体をきっかけに、スタッフの小澤加代子さんからボランティアを募集していることを聞いたからである。当時の私は学芸員を目指す大学生で、とくに博物館における市民の学びに興味を持ち、さらに生き物が好きだったことから、迷わずさけ科学館で活動することを決めた。

手づかみでサケ捕獲からミンク駆除まで

さけ科学館におけるボランティア活動としては、ボランティア通信の発行やボランティアの活動を伝える WEB ページ ikura の製作などを行っていた。

同 WEB は、2001年に北海道新聞社主催「もっと北海道 WEB 大賞」の自然部門大賞を受賞した。河川における捕獲・産卵床調査では、上流で職員が逃したシロザケが私の股下に逃げ込んだので手で捕獲し、「クマ女」の称号を頂いたのも良き思い出である。

一方飼育業務での思い出はなんといっても1999年の春先頃起きたミンク事件である。水槽掃除をしていたら、お客さんに「イトウ水槽でミンクみたいな動物が泳いでいましたが、飼っているのですか？」と声をかけられた。その時は見つからず、後に木村式水槽で上手に魚を取るミンクを目撃！岡本康寿職員（現館長）と偶然現れたボランティアの石川清さんと数時間奮闘の末捕獲に成功した。その後のミンクは佐藤信洋職員の手によって山に返されたことを鮮明に覚えている。

出来ることで関わる

さけ科学館での貴重な経験を活かし、現在は全国の博物館の展示企画制作やワークショップの企画運営を



写真1 1990年代、豊平川で職員とサケの調査をする高尾戸美さん(左)

している。2009年には「川と海を旅する魚たち」展を実施した。今後もボランティアとして出来ることを通じて、さけ科学館と共に歩んでいきたいと思う。



写真2 2010年1月23日「世界でひとつのサケ缶をデザインしよう!」は高尾戸美さんらとともに企画実施した。中央で缶詰の説明をするのが高尾戸美さん

04 学生時代から社会人になってもさけ科学館と関わって

札幌市環境保全アドバイザー(水辺環境)
建設コンサルタント会社勤務 渡辺 恵三

学生時代からボランティアとして関わり、現在は河川に関わる仕事を通じてさけ科学館と調査の仕事をする事も多い。

「ボランティアの会」には、大学の研究や実習でさけ科学館にお世話になり、その後も長く関わり続ける人も多い。私もそれに近い。大学の頃、五輪通りで豊平川を渡ることは日常であったが、4年生になるまでさけ科学館に立ち寄ったことはなかった。自然に懂れて北海道に来たというのに、当時は身近な自然にはあまり目を向けてはいなかった…。卒業研究のため、遠くの標津サーモン科学館で半年を過ごした後の晩秋に初めてさけ科学館を訪れた。そして、豊平川や琴似発寒川での産卵床調査に同行し、身近な街中の川にサケが遡上し、産卵していることをホッチャレの臭いとともに知った。遠くの家や山もいけれど、こうして、札幌の身近な川の魅力に

気づくことができた。これからも、さけ科学館といっしょに身近な川に関わり続けていきたいと思う。伝えていきたいと思う。

大学を卒業してから、河川環境の保全と整備に関する仕事をしている。この仕事に携わりながらも、さけ科学館の調査やイベント、コーヒーを飲みながらの雑談で教わったこと、学んだことはとても多い。川の歩き方、投網の投げ方、淡水魚の同定や分布、生息環境、昔の話や旬な情報、川の楽しさや危なさ等々、たいへんお世話になっている。

さけ科学館が豊平川とさけに限らず、広く河川環境に携わる市民・子ども、学校・研究者、行政、民間が集う場であり続けることを願っている。



写真1 1990年代、当時さかな館で行っていた「サケの採卵実習」でボランティアスタッフをする渡辺恵三さん(写真上右)



写真2 2013年10月 仕事でさけ科学館と共に川の生き物の調査をする渡辺恵三さん